

仏教が排除したもう一つの「輪廻説」

——父と息子の一致をめぐる——

松 濤 誠 達

古代よりインドの宗教や思想は、いずれの場合であっても、「輪廻思想」を前提としていると考えられる。それは、いわゆる六師外道の中で業にもとづく果報の存在を否定し、したがって輪廻を否定したプーラナ・カッサパ(Purana, Kassapa)の場合でも、唯物論的な思想をとなえたバクダ・カッチャーヤナ(Pakudha, Kacciyana)の場合でも、ニヒリズム的な考えを抱いていたというアジタ・ケーサカンバリン(Ajita, Kesakambalin)に關しても、輪廻を否定したという意味において、輪廻を前提としていると言い得るであらう。

古代インドにおいて輪廻思想が明確な形で記されるの

は「ウパニシャッド(Upaṇiṣad)」にはじまると言えるであらう。⁽¹⁾これは「ヴェーダ(Veda)」と称するインド最古の文献の最後尾を構成し、「ヴェーダ」が前提とする祭祀と直接・間接にかかわりあった内容を持っている。その作成された時期はほぼ仏教やジャイナ教の成立時期と重なり、したがって輪廻思想の成立時期が暗にここに読みとれるように見える。しかし「ウパニシャッド」の輪廻思想とシュラマナ(Sramaṇa)たちのそれとの関係が因果的に説明しうるか否かは定かではない。

いずれにせよ輪廻は邪悪なものであって、人びとはそれからの脱却すなわち解脱を求めた。輪廻における生存

はしたがって否定さるべきものであった。個人が、永遠に反復する生存の状態を超越することを通して、不死あるいは最も確固たる「生」を勝ち取るということが、輪廻説の背景をなす究極的な理想であった。

これに反して、個人としての存在を永遠に継続させることによって、死を克服し不死を確立しようとする思想もまた古代インドには存在した。文献に現れるという点のみから見るならば、この思想は輪廻説よりもさらに古い起源を持っている。しかし輪廻説が「ウパニシャッド」においていわゆる五火二道説⁽²⁾のように、また仏教の六道やジャイナ教の世界観のように体系化されたのに対し、この思想は常に極めて素朴な形のままに留まり、決して体系を整えることはなかった。

個人としての存在を永遠に継続させることによって不死が確立され得るとするこの思想を、輪廻説に対して、便宜上「相統説」と呼ぶことにしよう。

「ヴェーダ」における相統説については、筆者はすでに他の機会に論じた。⁽³⁾ここにそれを再び述べる必要はないので、その骨子のみを簡単に記しておこう。

父親は、かれに息子が生まれると、不死(amṛtva)を獲得することができる。父親は胎児として妻の胎内に入り、かれ自身の息子としてかれの妻から生まれる。したがって死を克服し不死を得るための手段は、父親と息子との完全な一致である。それであるからこそ、息子を得ることは父にとって不可欠である。父と息子との完全な一致が実現するためには、妻ないし母の介在は許されない。あるいは妻ないし母の役割は単なる「生成の場(abhūti)」とされる。換言すれば、超自然的な誕生によってのみ「死」は克服される。しかし超自然的な誕生は非日常的な手段、すなわち超絶的な力ないしメカニズムの介在があつてはじめて可能となる。

この論において検討を加えようとする問題は、このように「ウパニシャッド」以前から現れている相統説が仏教文献においていかなる形で、またいかなる意味を表明しつつ現れるかということにほかならない。輪廻をも含

む「苦」からの脱却を説く仏教は、特に初期においては、父と息子との完全な一致を通しての不死の獲得を奨励するどころか、修行者の場合は出家することが不可欠である。その意味で相統説は仏教の思想とは互に相容れない内容を持っている。それにもかかわらず相統説は見えがくれに仏典の中からその姿を現しているのも事実である。仏典に現れる相統説を検討するに際しとりあえず「ジャータカ (Jātaka)」を資料として選択することしよう。言うまでもなく「ジャータカ」も釈尊の輪廻転生をテーマとしたものであって、その主旨の上からは相統説とは矛盾している。

この相統説が実際に輪廻説を前提とした「ジャータカ」に存在することを、まず実例をもって示してみよう。その最も適切な例は『ウッダーラカ・ジャータカ』⁽⁵⁾である。それは次のような説話上のアウトラインを持っている。

ベナーレス (Benares) でブラフマダッタ (Brahma-

datta) 王が支配していたとき、菩薩はプローヒタ (Purohita) であった。かれは一人の遊女 (Garika) に逢い、かの女は妊娠した。かの女は、生まれる子に祖父 (ayaka) の名を付けたいと言ったが、かれはウッダーラ (Udāra) という木に因んで子の名をウッダーラカ (Uddālaka) とせよと言い、かれの印形の指環 (aṅgulimudrika) を残し、「もし男の子であつたら、かれが年ごろになったときに私に見せてほしい」と言い置いて去った。

やがて男の子が生まれ、ウッダーラカと名づけられた。かれが年ごろになると、指環を持ってタッカシラ (Takkasīra) に行き師のもとで技芸を学んだ。あるとき一群の苦行者 (tāpasagana) に逢い、かれらの仲間に入つて、ついに師の地位 (acariyattāna) を得た。かれは苦行者たちをひきつれてベナーレスに行乞に行き、人々から施物を得た。

有徳の苦行者がやつて来たという人びとの評判を聞いて、王はプローヒタをともなつてウッダーラカに逢いに来た。ウッダーラカは王の尊敬を得ようとして苦

行者たちにみせかけの苦行を実行させた。王は苦行者に満足して詩節をもつてウッダーラカに問いかけた。プローヒタは王がだまされているのに気づいて、詩節をとなえて王をたしなめた。ウッダーラカは父であるプローヒタと問答し、かなわぬと知って、みずからプローヒタの息子であることを詩節によって名乗った。

プローヒタは自分の指環によってウッダーラカが実子であることを知った。プローヒタとウッダーラカは「バラモンとはいかなるものか」をめぐって詩節によって論議を交し、ついにウッダーラカは言葉に窮して沈黙した。そこでプローヒタは王に願つてウッダーラカを副プローヒタ (upapurohita) とし、他の苦行者たちを王の従者 (sevaka) とした。ウッダーラカは現在の人を欺く出家修行者 (kuhatabhikṣu) であり、王はアーナンダ (Ānanda) であり、菩薩こそプローヒタであった。

この「ジャータカ」の中で、ウッダーラカがプローヒタに対し自らが実子であることを打ちあける詩節が実は

重要である。しかしその詩節は読みの上で問題があり、同時に難解な語を含んでいる。まずパーリ語による本文を挙げてみよう。

Bhaccā mātā pitā bandhū, yena jāto sa yeva so,
Uddālako aham bhoto sottiyaṅkulavamsako.

この詩節において、mātā pitā としたところを V. Fausbøll は *mātāpitā* と複合語として読んでいる。その上に冒頭の *bhaccā* が問題である。実はこの詩節の前半 (Bhaccā kara yeva so まで) は Sanskrit 語の大叙詩事『マハーバーラタ (Mahābhārata)』にパラレルな詩節があり、それは

mātā pītuh putro yena jāto sa eva sah.

である。この「ジャータカ」に対する註⁽⁶⁾ *mātāpitā* と複合語に解しているが、パラレルな詩節と、パーリ語によるこの詩節のコンテキストとから見て、*mātā pitā* と切った方が良さそうである。

一方 *bhaccā* については註はこれを *bhr.* に還元して *Gerundive* と取つてゐる⁽⁶⁾。しかし、Sanskrit 語のパラレルな文を尊重するならばこの語は Sanskrit

語 *blasta-* のプラークリット形とも考えられる⁽¹⁰⁾。なおそのほか、プラークリット形 *blacca-* の女性形⁽¹¹⁾、アルダマーガデー (*Arđhamagadhi*) 語 *bhaja-* を期待する形⁽¹²⁾ などと想定することも不可能ではない。今は、一応サンスクリットのパラレルの文を第一と考えて、次のようにこの詩節を翻訳しておこう。

『母親は「水を運ぶ」皮袋であり、肉親は父親「のみ」である。なぜならばかれ(Ⅱ父親)は生まれたかれ(Ⅱ息子)だからである。

わたくしはあなたの「息子である」ウッダーラカであり、学識高き「バラモン」の家系に属するものである。』

この詩節の *blacca-* をデーシー (*Dśi*) と考えて「妹の娘」と理解することはコンテクストの上からいささか唐突であり、アルダマーガデー語の *bhaja-* を予想するのもコンテクスト上一見奇異ではあるが⁽¹³⁾、この詩節をめぐる状況が、息子が目の前にいる人物が父親である

ことを自ら告げる場面であることを考慮すれば、大筋からみてあまりに荒唐無稽に過ぎるとも断言しえないであろう。

要するに、この詩節の言わんとするところは、父と息子の一致という観点からすると母は単なる生成の手段にほかならぬということであり、父と息子との一致を前提としたいわゆる相統説⁽¹⁴⁾である。それは、ウッダーラカが苦行者をやめて再び父のもとにもどるといふ、この「ジャータカ」の結論部分によっても補強されていると考えられよう。

なお、この「ジャータカ」は、後世の詩人カーリダーサ (*Kālidāsa*) が著した戯曲『シャクンタラー (*Abhijñānaśakuntala*)』の原話の翻案とも考えられる。この戯曲の原話と思われるものが『マハーバーラタ』にあり、まさにその原話の中に、今問題にした詩節のパラレルな文が現れるのである。

さらに一つの例として『ソーマナッサ・ジャータカ (*Somanassa-jātaka*)』⁽¹⁵⁾ を挙げてみよう。これについては

すでに述べたことがあるが⁽¹⁶⁾、簡単にこの「ジャータカ」のアウトラインを記した上で、そのポイントのみを記しておきたい。

レーヌ (*Renu*) 王には息子がなかった。かれの宮廷にマハーラッキタ (*Mahārakkita*) という名の苦行者が五百人の苦行者とともに雨期を過していた。雨期が終ったとき、かれら苦行者は宮廷を辞したが、その途中でマハーラッキタは、「王の第一王妃が神の子 (*deva-putta-*) を次の日の朝に懐妊するであろう」と予言した。これを聞くとディッパチャックカ (*Dibbacakkhika*) という苦行者は病氣といつわってレーヌ王の宮廷にもどり、王に対し「王に息子が生まれるであろう」と告げた。王は大いに喜んでかれを丁重に遇し、かれに宮廷に滞在するよう求めた。やがてソーマナッサ (*Somanassa*) という王子が誕生した。王子が七歳になったときかれはディッパチャックカが野菜を栽培してこれを売り、莫大な利益を得ているのを知り、かれを非難した。ディッパチャックカは自らの窮地から逃げ

るため、奸計をめぐらし、王をあざむいてソーマナッサを殺させようと試みた。ソーマナッサは事実を説明して苦行者の嘘をあばいたが、王の愚かさな落胆し、両親の制止するのも聞きいれず苦行者となつてピマレーヤに去った。神格 (*devatā*) にかしづかれたかれはヴィッサカカンマ (*Vissakamma*) 神の作った草庵で修行生活を送り、ブラフマンの世界に達した (*brahm-āloka-pāga*)。邪悪なディッパチャックカは殺された。ソーマナッサは前生のブッダ (*Buddha*) であり、かれの母親はマハーマヤー (*Mahāmāyā*) であり、マハーラッキタはサーリプッタ (*Sariputta*) であつた。またディッパチャックカはデーヴァダッタ (*Devadatta*) であつた。

すべての「ジャータカ」がそうであるように、ここでも輪廻説がストーリーの表面に顕著に現れていて、それはこの結論部分の示すとおりである。しかし「ソーマナッサ・ジャータカ」の特徴は、息子のない父親がソーマナッサという息子を獲得しながら、ついに離別に導かれ

るという点である。そこには父と息子との一致は著しく強調されることなく、むしろ両者の離別に焦点がしぼられている。それは主人公の性格によるものであって、前生のブッダ（『ソーマナッサ』）の世俗からの出離が仏教の理想である解脱への条件として強調されていることにはかならない。実は仏教の説話の中にはこの類のものが数多く含まれている。

一方、相統説は一見したところストーリーの裏面に追いやられてはいるものの、ソーマナッサの誕生といういわば超自然的な誕生の中に凝縮されて示されていると言えよう。何故かれの誕生が超自然的であるか。それは、苦行者の予言という超絶的な力によって成立したからである。しかもその超絶的な力としての苦行者の予言はアンビヴァレントな性質を持つものとして与えられている。すなわち善良な苦行者であるマハーラキタの予言と邪悪な苦行者であるディンバチャックカの予言という対照性がそれである。ここに苦行者の予言の超絶性を見ることができよう。

「ジャータカ」における相統説のほとんどは前述の『ソ

ーマナッサ・ジャータカ』のパターンを追っている。その場合に、父と息子との一致、ないし、息子の超自然的な誕生を実現する超絶的な力は種々の形をとって現れる。その極端な例を次に挙げてみよう。それは『ハッティパーラ・ジャータカ（*Hatthipala-jātaka*）』である。⁽⁴⁷⁾「ジャータカ」としては長編に属するものであるので、筆者の主旨に相当する部分のみを抽出して記そう。

ベナーレスにエースカーリン（*Esukarin*）という王とかれの親友のプローヒタ（*puṇḍita*）がおり、かれらには子がなかった。もし王に子が生まれたら、プローヒタの財産を継がせ、プローヒタに子が生まれたら王位を継承せようと二人は約束した。

プローヒタは、父親がいなくてもかわらず七人の子を持った女に、ニグロダ樹に住む神格（*nigrodhe adhiyathadevata*）に願うと子が得られることを教えられた。プローヒタは六日にわたってその樹神（*rukhi-adevata*）を強迫した。恐れた樹神は四人の大「天」王（*catur mahārāja*）に助力を求めたが無力なことを

知り、二十八のヤツカの將軍（*atthavīsatiyakkhaseṇapati*）を訪れ、ついにサツカ（*Sakka*、帝釈天）に助力を求めた。サツカは四人の神の子（*devaputta*）を見つけて出し、かれらをプローヒタの子とすることを約束した。ただし神の子たちは、若い時に自ら出家することと条件として求めた。七日目にやって来たプローヒタに樹神はその旨を伝えた。やがてプローヒタにハッティパーラ（*Hatthipala*）以下の四人の息子が次々に生まれた。王とプローヒタは四人の息子が出家するのを恐れて、出家者を近づけず、まずハッティパーラを王位につけようとしたがかれはそれを振り切って出家してしまった。他の三人の弟も同様であった。ついに出家の意義を知って、王もプローヒタも王妃も、その他の七人の王もそれぞれ出家した。

ここではエースカーリン王とそのプローヒタは不可分の関係に置かれ、むしろ一体視されており、樹神、四大「天」、二十八ヤツカ將軍、サツカが介在することによって、プローヒタに息子が誕生する。この超自然的な誕生

によって順次四人の息子が得られるが、『ソーマナッサ・ジャータカ』の別離にかわって、ここでは全員の出家が強調される。父が二重のイメージで現れる点、息子の数、結末の出家の点で、この「ジャータカ」は『ソーマナッサ・ジャータカ』とかなりの差異があるように見えるが、「子のない親」息子の超自然的な誕生「息子の出離」という枠組から見れば、この二つの「ジャータカ」は同一パターンであると言えよう。

なお、王とプローヒタとは古来たがい補足的な関係にあり、たがいに表裏一体をなすことが明白である。⁽⁴⁸⁾この「ジャータカ」の例もその一環であると言えよう。

同じく子のない人にサツカが息子の超自然的な誕生を実現させ、しかも息子は出家するというタイプのストーリーは、「ジャータカ」の中に散見され得る。すなわち、『スルチ・ジャータカ（*Suruci-jātaka*）』もその一例である。そこでは、ミティラー（*Mithilā*）王スルチ（*Suruci*）の息子スルチクマラー（*Suruci-kumāra*）はベナーレス王ブラフマダッタクマラー（*Brahmadatta-kumāra*）の娘スメダー（*Sumedhā*）と結婚しても子がなく、スメダー

ーによる布薩の戒行によってサツカが動かされて、ついにマハーパナダ(Mahāpanda)という息子が生まれることとなる。⁽²⁰⁾ スルチ王の息子が同名を持つことも相統説の一つの現れと考えられる。⁽²¹⁾ しかしマハーパナダが徳を積んで天に帰るという結論部分のモチーフは出家そのものとは異なり、前述の『ソーマナツサ・ジャータカ』における場合と同様である。

このモチーフは、さらに極端化されると、息子の超自然的な誕生をもたらす超絶的な神力が変質し、前生のブツダないし戒行の正しい人が受胎可能な時期にある妻(utuni)の臍(nabhi)に触れる(parānā)と息子が受胎するという表現となるとともに、ストーリーの結末は、父と息子との離別そのものか、それが示唆されるかのいずれかになる。結末部分の解釈については前述のとおりである。

このモチーフがさらに極端化され単純化されると、息子のない親が願ったり、あるいは祈ったりすることによって息子を得るという形に帰着するのである。そしてその結末は『ソーマナツサ・ジャータカ』のようにブラ

フマンの世界に息子が赴くとされたり、息子が出家するとされたり、いずれにせよ出離と多かれ少なかれ関係することとなる。

上來検討を加えてきた問題は、仏教文献、とりわけ「ジャータカ」に現れる相統説であった。再びここに述べるまでもなく、「ヴェーダ」に顕著に現れる相統説は「ジャータカ」それ自身が前提としている輪廻説とはその意味の上で矛盾するものであった。したがって「ジャータカ」がその内部に相統説を混入させつつ釈尊の前生を説くことはとりもなおさず自己矛盾の表明にほかならなかった。今まで検討したように、矛盾を孕ませながらも相統説が「ジャータカ」に現れているその理由の一つは、「ジャータカ」がその素材を『マハーバーラタ』などの仏教以外文献と共通のストーリーのいくつかを持っていることであるとも言えよう。

しかし「ジャータカ」は自らの輪廻説とこのような相統説の間の矛盾には確かに気付いてはいたけれども、その矛盾に当惑することはなく、むしろ積極的な解決方法

を導入することによってそれを解消しようと試みたにちがいない。その解決方法とは、父と息子の一致の局面に現れる両者の離別であり、父か息子(多くは息子)によるブラフマンの世界への到達などの宗教上の理想の達成であり、出家の実現という、ストーリー上のこのような結論を導入することにほかならなかった。それは相統説の意味論上の否定であり、そのまま輪廻説の肯定であり、同時に輪廻からの脱却に門を開くことにも通じたのだと思われる。

相統説は「ジャータカ」以外の仏教文献にも現れる。その一部分については他の論文(前掲「シユナハシェーパ説話の意味」)で触れておいた。

注

- (1) 拙著『ウパニシャッドの哲人』(『人類の知的遺産』2、講談社、昭和五五年)一五三ページ以下。
- (2) 拙著、前掲書、二八五―三〇三ページ。
- (3) 拙稿「シユナハシェーパ説話の意味」(『大正大学研究紀要』第六七輯、昭和五七年二月、一一八ページ)。
- (4) 干潟龍祥『改訂増補版、本生経類の思想史的研究、附

篇、本生経類総合全表』(山喜房仏書林、昭和五三年)。平川彰『初期大乘仏教の研究』(春秋社、昭和四三年)など。

- (5) V. Fausbøll (ed.): *The Jātaka*, together with its Commentary, being Tales of the Anterior Birth of Gotama Buddha, Vol. IV, 1887, p. 297-304. (Jātaka No. 487).

(6) 宮廷付きの祭司。

- (7) V. Fausbøll (ed.): *op. cit.*, p. 301.

- (8) Mahābhārata (Poona Critical Edition) 1, 69, 29 ab.

- (9) bhaccā ti mātāpiṭā ca sesabandhū ca bhartabba nāma. (V. Fausbøll: *op. cit.*, p. 301) しかしこの解釈は、意味をなさずわけではなさが必要し、必ずしも必ずしも認むべきわけではなさ。cf. W. Geiger: *Pali Literature und Sprache*, Strassburg, 1916, §199f.

- (10) 此れは難点がなすわけではなさ。W. Geiger: *op. cit.*, §52, 2. Skt. bhastrā: Pali bhastā.

- (11) Pāśadamaṇaṇavo s. v. bhacca. この場合は Deśi だ「妹の子」の意。したがって bhaccā は「妹の娘」となる。

- (12) AMg. bhajā: Skt. bhāryā. 「妻」の意。ただし Pali bhāryā.

- (13) 相統説のコンテキストにおいて妻と母親を同一視する

p. 278-312. (Jātaka No. 531).

(21) 註(14)参照。

(22) 例として『マータンガ・ジャータカ (Mātanga-jātaka-)』
V. Fausbøll (ed.): *op. cit.*, Vol. IV, p. 375-390.
(Jātaka No. 497). 以下『サーマ・ジャータカ (Sāma-jātaka-)』V. Fausbøll (ed.): *op. cit.*, p. 68-95. (Jātaka No. 540).

(23) 以下『カンク・ジャータカ (Kanh-jātaka-)』
V. Fausbøll (ed.): *op. cit.*, Vol. IV, p. 6-14. (Jātaka No. 440). 『クリャンナ・ジャータカ (Cullabodhi-jātaka-)』V. Fausbøll (ed.): *op. cit.*, p. 22-27. (Jātaka No. 443). 『ヘーナ・ナンタ・ジャータカ (Sonanda-jātaka-)』V. Fausbøll (ed.): Vol. V, p. 312-332. (Jātaka No. 532).

(まづなみ よしひろ・大正大学助教授)

- 理解は、古代インドに存した。したがって、その意味では必ずしも奇異とのみは言い切れない。cf. Aitareya-brāhmaṇa 7, 13, 11~13.
- (14) この「ジャータカ」の冒頭で、ウッターラカの母が生まれるであらう息子に祖父の名をつけたいと希望するところ、相續説の一つの現れであると思われる。なぜなら、名はそれを持つ者の本質を意味するところを考へて古代インドには名をあらわさず cf. J. Gonda: *Notes on Names and the Name of God in Ancient India*, Amsterdam-London, 1970.
- (15) V. Fausbøll (ed.): *op. cit.*, p. 444-454. (Jātaka No. 505).
- (16) 註釋「シタナ・シマ・シマの語源を意味する」。
- (17) V. Fausbøll (ed.): *op. cit.*, Vol. IV, p. 473-491. (Jātaka No. 509).
- (18) 王とローヒタとの緊密な関係およびその根拠として J. Gonda: 'Purohita', *Selected Studies*, Vol. II, Leiden, 1975, p. 320-337.
- (19) V. Fausbøll (ed.): *op. cit.*, Vol. IV, p. 314-325. (Jātaka No. 489).
- (20) cf. Mahāpanāda-jātaka. V. Fausbøll (ed.): *op. cit.*, Vol. II, p. 331-335. (Jātaka No. 264). 以下『サマ・ジャータカ』V. Fausbøll (ed.): *op. cit.*, (Kusa-jātaka-)』V. Fausbøll (ed.): *op. cit.*,